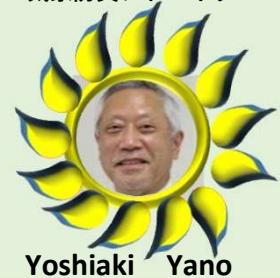


# こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地元の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として国土交通大臣が委嘱した方です。



## 注意!? 冬の青空と乾燥の裏側で・・・

日が進むにつれて寒さが一段と厳しくなってきました。出勤や外出の際に、コートや手袋、マフラーをどうするか悩むほど、冬の気配が本格的になっています。

一方で、空は紺碧に澄み、通勤・通学などの移動中には、スカイツリーや雪を冠した富士山がビルの合間から姿を見せることもあります。

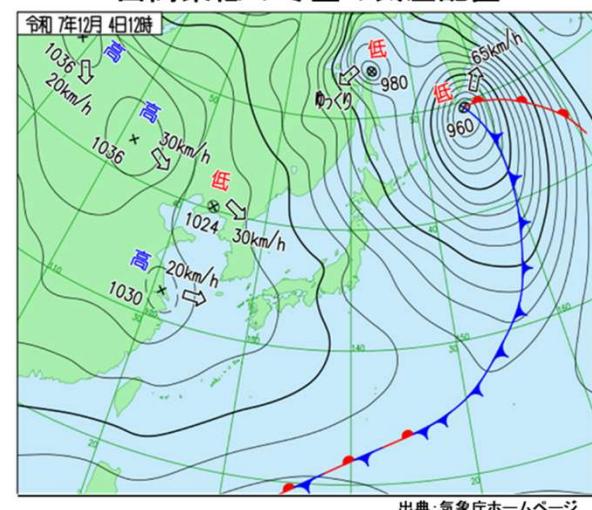
こうした日の天気図を見ると、大陸付近に高気圧があり、本州の東海上には発達した低気圧が位置し、本州付近ではほぼ南北に伸びる等圧線が幾つも見られることがあります。

よく耳にする「西高東低の冬型の気圧配置」です。

広大なシベリア地方では、冬になると放射冷却が強まり地表は大きく冷やされ、地表付近の空気はどんどんひえていきます。海から離れた大陸の空気は非常に乾いており、冷たく重くなった空気の一部が日本海や日本列島に向けて冬の季節風として吹き出します。

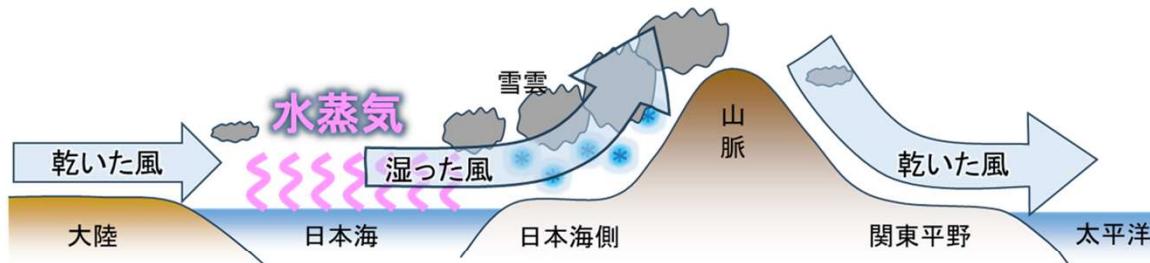
ここで、日本海と日本列島の山々が重要な役割を果たします。大陸からの乾いた空気は日本海を渡る間に、相対的に温かい海面から大量の水蒸気の供給を受け、次第に湿っていきます。日本海の海面と大気下層の空気の温度差が大きいときには“湯気”が立ち上り、目で確認できることもあるそうです。たっぷり水蒸気を含んだ空気は雪雲を作り大きく成長していきます。

西高東低の冬型の気圧配置



出典：気象庁ホームページ

### 日本海側で大雪、関東平野で晴れ の仕組み



日本海で作られた雪雲や水蒸気を含んだ空気は日本列島に上陸し、山脈に突き当たって駆け昇っていきます。上昇するにつれて空気は冷え、含んでいる水蒸気も凝結・結晶化して、雪となって降ります。これが日本海側の平野部や山沿いに大雪をもたらす仕組みで、大雪のもとになるのは、日本海の海面から立ち昇る水蒸気というわけです。

雪を降らせたあとの空気は乾いていて、今度は関東地方など太平洋側へと吹き下ります。この風の呼び名は地域によって異なりますが、「おろし」とか「からつ風」となどと呼ばれています。群馬県など関東北部では、「赤城おろし」「上州の空つ風」などとして知られています。「からつ風」は文字どおり乾いた風です。これらの風は関東平野を南下し、太平洋へと吹き抜けていきます。

関東地方・葛飾区付近の冬の晴天は、このようなスケールの大きな気象現象と、地形に起因するスケールの小さい現象から生じています。

関東地方での冬は、寒さがそれほど厳しすぎず、空気が乾いて晴天の日が多いことから、一見すると過ごしやすいと感じる面もありますが、生活面ではさまざまな影響があります。空気が乾燥すると、肌の保湿力が低下して乾燥肌になりやすくなります。また、インフルエンザウイルスは低温・乾燥した環境で活性化しやすく、空気中に長く漂いやすくなるため、喉や鼻の粘膜の防御機能が弱まることもあって、感染が広がりやすくなります。

空気の乾燥の程度を示すには“湿度”がよく使われます。正確には「相対湿度」と呼ばれ、その温度で空気がどれだけ水蒸気を含めるかの割合を示します。「蒸し暑い」とか「乾燥している」といった体感を比較的良く表す指標です。

東京の1月の平年値では、平均温度は5.4°C、相対湿度は51%です。この51%は、気温5.4°Cの空気1立方メートルが、含むことができる最大の水蒸気量（飽和水蒸気量）7.0gに対して51%、すなわち“3.6g”の水蒸気が含まれていることを表しています。

参考として、東京の気温と湿度の平年値を用いて水蒸気量を算出すると、

- ・ 年平均 気温 15.8°C、湿度 65% ⇒ 約 8.8g
- ・ 8月 気温 26.9°C、湿度 74% ⇒ 約 19.0g

となります。

つまり、1月の空気中の水蒸気量は、年平均の約4割、8月の2割ほどしかありません。冬は空気中の水分も、木材などに含まれる水分も少なくなっていて、火がつきやすく、延焼しやすくなっています。



インフルエンザの警戒、火の用心——冬ならではの注意が必要な季節です。

問い合わせ先 危機管理課計画係 電話 2277

令和7年11月8日  
危機管理課発行